

校長室だより～和光高校今昔 第8号 H26.6.28

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

剣道部の歴史

和光高校剣道部は、開校2年目に大西隆一先生の着任によりその歴史の幕を開ける。毎年50名あまりの部員が稽古に精を出し、昭和52年に赴任された上村隆昭先生の指導も加わり西部地区ではトップを常に争い、51年新人戦県3位、53年新人戦県2位、54年学徒総合大会県2位（関東大会出場）、新人大会県3位、55年学徒総合大会県2位（関東大会出場）（以上男子）、53年インターハイ個人出場、54年新人戦県3位（以上女子）と華々しい成績を収めていた。しかし53年度をもって上村先生が郷里に戻られ、大西先生の双肩にかかることとなった。

この窮地を救ったのが、格技場が建設された年に颯爽と登場した栃木の快男児北村和男教諭（現朝霞高校勤務）である。昭和56年2月、まだ筑波大学4年生の凛々しい若者が剣道場に現れた。以後、大西先生との二人三脚は剣道部に多大な功績を遺すこととなった。ちなみに当時の北村先生の持ち歌は、吉幾三の「おら東京さいくだ」。出勤初日、それまでめったに乗ることのなかった電車で混雑のため和光市駅で降りられず大遅刻となったことなど「田舎エピソード」には事欠かない。大西先生の転出後は、平岩真一先生（現杉戸高校勤務）とのコンビで、部員不足に悩む中だったが剣の道を生徒と一緒に追い求めたのである。

北村・平岩先生が相次いで転出され、いよいよ顧問がいなくなった平成5年だったが、木村郁文先生（現所沢北高教頭）により窮地が救われる。木村剣道の専門家ではなかったが、持ち前の人柄を生かし、人間形成を極とする献身的な指導をおこない、部の存続の危機を乗り越えたのである。

現在の和光高校剣道部も相変わらずの部員不足に悩んでいる。しかし30年以上にわたって多くの汗を吸いつつ見守ってきた道場はかわらず綺麗に磨かれている。再びかつての栄光を取り戻す日を待ち望んでいる。